

せたかむい

発行 古平町史編さん室
文化会館 842-12590
第205号 平成18.10.1

年表で読む 古平の歴史

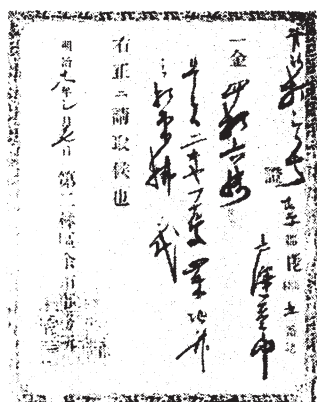
《110》

林業

◇森林の保護 ー続き

山林監守の取締りや、雑産物の
の松下げに關しては次のような
書類があり、少量の用材だと郡
長が許可証を出していた。

← 証 (入林許可証)



証

湊町

第拾号

戸澤榮太郎

一金六拾錢

樞式拾石松下代金

但不日本証ト引換候事

右正ニ受取候也

明治十六年 古平郡山林監守

七月十一日 寺田讚治郎 印

※樞ニ建築の下地などに使う

(こま)

明治一九年、古平外二郡役所の
事務引継書に、林木の伐採につ
いて次のような注意書がある。

林木伐採の注意

「古平郡内デ需要ニ応シラレ
ルヨウナ薪炭ヤ建設用ノ木材
ハ、今デハオヨソ一里半(六キ)

カラニ、三里(八十二キ)以
上ノ距離ヲ行カナケレバ伐採
ハ不可能デアル。

ソレナノニ郡内ノ鍊建網ハ
オヨソ二百五十統(個所)モア
リ、コレヲ一統ニツイテ百數使
ウトスレバ二万五千數、同ジク
刺網業者ガオヨソ二百五十戸
アリ、一戸デ二十數トシテモ五
千數、ソレニ郡内ノ戸數ハ千六
百六十五戸アリ、日常、一戸十
數トシテ一万六千六百五十數、
合計四万六千六百五十數ガ必
要トナル。

ソノ他ニモ木炭、漁具、漁場
ノ建設用ニ使ワレル木材モ莫
大デアル。コノママデハ、コレ
ヨリ十年ヲ經ナイデ林木ノ欠
乏スルコトハ明ラカデアル。

今カラコノコトヲ考エテオ
カナイト、今後、郡内ノ人達ハ
漁業ヲ継続スルコトハ困難ニ
ナルダロウ。実ニ恐ルベキハコ
ノ点デアル。マタ、林木ノ生長
育成ニモ二、三十年ヲ經ナケレ
バナラナイ。ソノタメニハ林木
ノ有効ナ利用ヲ考エ、鍊粕製造
用ノカマドノ改良モ図ル必要
ガアル。」

◇伐採許可と価格

明治一八年、薪一數(一しき)長
七六サの薪を高き一・五サ。
幅一・八サに積んだもの)の価格
は、生産者渡して一円一〇錢で
あつた。また、明治二二年、漁業
用材の稻倉石からの松下げ価格
は次のようであつた。

稻倉石からの材木の輸送は、古
平川の増水期を利用して上流か
ら流し、河口に近いところに貯木
場(土場)を設けていた。それで当
時からその附近を土場と言ひ、
現在でも地名として残っている。
余談だが、稻倉石周辺の川岸で
偶然に金鉱脈を発見した(後の
稻倉石鉱山)、大井嘉蔵ら三人
も、薪の切り出しや流木の作業
をしていた柚人(そまびと)きこ
り)であつた。

トドマツ(一本)

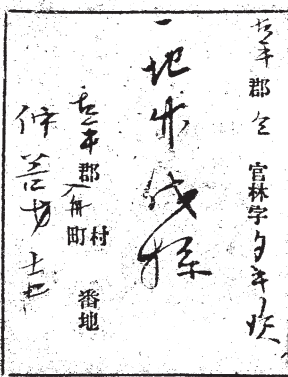
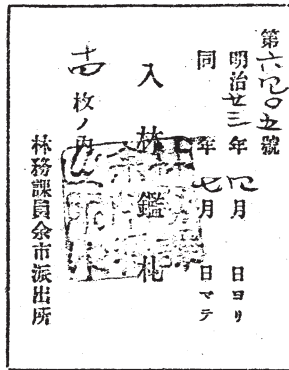
径八寸以上一尺	一三錢八厘
一尺二寸	二〇錢七厘
一尺四寸	二三錢三厘
一尺六寸	四四錢八厘
二尺四寸	二尺六寸

一円八一錢二厘
漁業用材などは、松下げの手

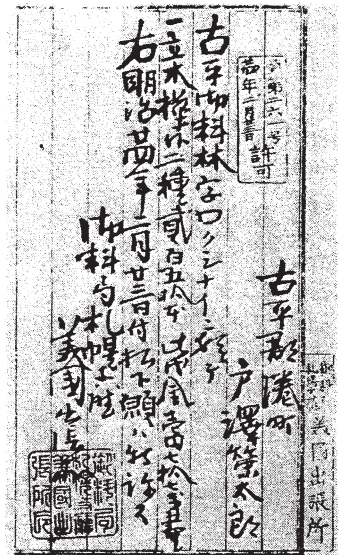
続きをしないで盗伐する者が出るようになり、戸長は諭示(役所から出す注意事項)を出して注意をうながした。

また、木材だけではなく、漁業用として使われる竹、草のツルなども入林鑑札を受けて伐採していた。次ページにあるのは最近、入船町仲谷さん宅から見つかったものである。

← 入林許可証



→ (払下げ許可書)



古平郡湊町 戸澤榮太郎

古平御料林字ロクシナイに於て
一立木樺外二種 式百五拾本
此代金一円七拾七錢五厘
右明治廿四年二月廿三日付
払下願ハ特許ス

御料局札幌支庁 美国出張所 図

明治三〇年、北海道庁の定め
で森林監守の規定と、駐在所の
位置や担当区域などが新しく決
められた。小樽外六郡役所(高
島・忍路・余市・古平・美国・積
丹)が管轄している地域の駐在所
は、小樽郡小樽・古平郡浜町・余

市郡浜中町の三方所
に置かれた。

古平郡浜町森林監
守駐在所は一時、古
平郡役所内に置かれ
古平郡の外、美国
郡・積丹郡を担当区
域とした。その後、駐
在所は新開町に設置
され、所長に成田常
範が任命された。

森林内の雑産物については小樽
支庁長が許可をし、次のような
文書が残されている。

(払下げ許可書)

後志国古平郡群来村十九番地
相内 米蔵

明治三十三年四月四日付願
後志国古平郡群来村字カヤノ

沢に於て篠箸拾束払下の件許可
候条 代金参拾銭明治三十三年
五月一三日限納付すべし

但し代金払込証を所管森林検
査員に示し物件の引渡しを請求
すべし

明治三十三年四月一七日

北海道小樽支庁長

久保 誠之 図

◇ 造林が進む

北海道庁では明治二六年、後
志国高島と祝津の官有地にカラ
マツを植林し、明治三四年には、
古平郡丸山保安林内の荒廢地約
三町九反(約三・九反)にも、同
じようにカラマツ三万五千本余
りを植林した。

この官有地へ植林したカラマツ
の順調な生育状態を見て、町民
は競って植林を始めるようになっ
た。漁業者などは財力があり林
地も所有していたことから、折か
ら鯨の好漁に恵まれたこともあ
つて、特に植林に熱心な者も見
られたようである。

明治三五年
一六町六反 一二万六千本
同 三六年

一二町七反 一五万二千本
植林は毎年順調に進み、苗木
不足をきたす状況であった。

(続く)



大正十四年　　続き

▼六月一日

起床四時半、今日は祝聖会の例会日。四人目であった。読経の後一時間ほど話し六時帰る。今日はイワシ大漁、昨日までは吉井一隻であったが、今日は浜中田岸、大谷外入船町からも四、五隻出たが、皆満船するという大漁だ。沢江などでもにわかに網騒ぎ、三〇〇〇四〇〇間が一時に売れる。群来村白岩からも問い合わせがある。古平町議選一級 高野、幾井、松座、墓目の四名当選

▼六月二日

起床五時、洗面後早々に浜へ出て見る。田岸、大谷の船が入港、大漁だ。七時頃吉井の船が大漁旗を立てて、畳の上のような上ナギに、五段型に満船にして入港。このよい天氣に大漁、浜を通る人もこの大漁ぶりにビックリ、漁夫らの喜びもどんなだろう。浜は何一〇人というイワシはずしの人で、鍼場のような人氣に一変した。急に出漁を思い立つて網を買い入れる者も多い。小樽田へ電話で二千間注文する。明日は着くだろう。ロープ、綿糸な

ど二〇〇余円出た。明年はどこもやると大した意気込みだ。

▼六月三日

今朝の漁況如何と四時半起床、早速浜へ出て見る。昨日にも増して大々漁、田岸の船など旗三本も立てて来る。二五把の網を一回に積み切れずに来たと言う。その間、吉井、大谷も来る。何れも大漁、入船町も大漁とのことだ。自転車港町安全丸の家へ行く。小樽田

高野孝作さんの日記から

当時の世相を見る

(116)

▼六月四日

イワシ大々漁、安全丸にて網が着く。新地へ行き、網分配に忙しい。イワシで浜は狂気の如し。

▼六月五日

イワシ大々漁、今までで一番厚く掛かったようだ。今日は学校の運動会だが、好景氣とイワシ大漁の景氣で近年稀なる盛大さであった。一〇時頃、群来村から網二〇〇間と付属品などで一四〇円ほど

からイワシ網、ロープその他、安全丸に積み込んで今日来る予定が来ない。方々からイワシ網入用の電話が忙しく来るので氣がもめる。沖村全の老婆の葬式送りに自転車で行き、正午帰る。沢江の保木も今日初出漁したが満船して帰る。町もイワシで大いに人氣が引き立つ。漁夫は狂喜している。早く網が来てくれればよいが。明朝は間違はなく来るだろう。

▼六月六日

起床七時、相変わらずイワシ大漁、浜方は大変な景氣だ。出漁する船も日増しに増え大小二〇余隻一〇〇人以上が乗っているだろう。

妻とコノさん、それに高太郎さんがワラビ、竹の子採りに行く。店はイワシ網の客で付属品も売れ忙しい。網もあと六〇〇間ほどになった。これも美国から電話の注文があったので、二、三日で無くなるだろう。イワシがとれた三一日以来本日まで七日間、毎日の大漁だ。上ナギ上天氣で、粕干しにこんなよいこともない。夜、部落会があり例会の当番だ。

▼六月七日

起床六時、イワシ中漁、毎日の好天氣で、イワシ干しにはこんなよいことはない。吉井では、去る三一日以来本日まで一〇〇石もとったという。しかもこの天氣で上粕が出る。今朝、美国の久米からイワシ網を買いに来た。網三〇〇間とほか付属品で一六〇円余り売る。あと残りは二五〇間になった。イワシの好漁、予想外の売れ行きで大勝利だ。熊さん、妻は午後から農園行き。リングゴは昨年は良くなかったが、今花盛りとのことだ。五日午後二時頃、岩見沢の大火では四〇〇戸余りが焼失、目抜き通りのため損害も一〇〇余万円という。氣の毒なことだ。

▼六月八日

起床七時、今日も快晴だ、去る二三日以来一五日も続く。イワシをとった人には実に幸いだ、農家は蒔きつけができないとこぼしている。イワシも薄くなつたので網や道具も今日は出ない。よい時に処分した。四千余間売つたので万歳だ。これからは貸し方の回収が専一だ。熊さんは天野さんと肥料運び。女連中は洗濯や張りものだ。横山さんから亡き妻の追悼会を一日にやるからと、ハイカラな招待状が来た。夜、電気会社の活動写真(映画)が古盛座であり父とトミが行く。

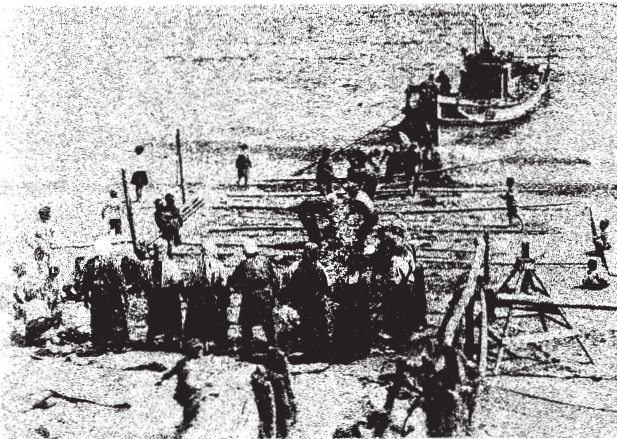
▼六月九日

起床六時、全から電話があり佐渡赤泊から、三保丸でアバ縄一三〇個が着いたとのこと、まだ積み込むなど言つたのに突然来ても困る。早速Ⅲに依頼して倉に入れてもらうことにした。Ⅱさんと天野さんを頼みⅢの胸鯨を片付ける。私は自転車で行き荷物を調べる、運賃八〇銭は高い。一一時までに全部倉に入れて帰る。朝からの曇り空も午後からは晴れた。今日で一六、七日も晴天が続く、イ

ワシ干しの連中は大喜びだが農家は困る。衛生掃除をやる、大仕事だ。日が長いから出来る。終わつて湯に入りサツパリした。この気候、二階の座敷にいると気持ちよい。

▼六月一〇日

快晴、今日もまた晴天だ。イワシ漁一五から一六玉とる、中漁だ。熊さんは農園行き。一〇時から横山夫人の追悼式があり行く。珍しい暑さだ。庭園も室内も暑いぞん



→ 本陣の浜でのイワシの陸揚げ
(この写真は昭和初期のもの)

きれいにしていて、洋式のところもあり文化生活だ。一一時から式が始まる。ヤソ教による式で、牧師が二名来ていて初めてだ。正午の休みに折り詰めが出る。芝生の上で休み、周囲の青葉を眺めつつ食べる。見晴らしのよいところだ。二時に終わり帰る。この頃一番の暑さだ。

▼六月一日

起床六時、今日も快晴、天気もこんなによく続くことだ。作物はこのため生育せぬとのことだ。イワシ漁今日は薄漁だ。美国からイワシ網一〇〇間買いに来る、今日一〇〇余円売る。熊さんと天野さんは農園の草取り、切つたリンゴの木や枝を束ね、馬車で家の裏に運搬する。Ⅱ大謀の官本さんから、アバ縄など買い入れるので品ぞろい頼むと電話が来る。大網の値段を調べ通知してくれとのことだ、Ⅲへ照会する。

▼六月二日

今日も朝から天気快晴、暑さが加わる。イワシ漁如何と浜に出て見る、薄漁だ。吉井の五玉を上とし、下は一玉ほどで先日來の人氣はない。しかし全部で五〇〇石以上、一万四、五千円は上げたよう

だ。明年は着業が多いだろう。八時頃自転車で行き、ついでに二、三軒貸し方を回る。△大謀の船頭さんに会い、アバ縄、大網売り込みのことを依頼する。帰つたのは一一時。坂安へ上半期残金五〇〇余円を送金する。二時頃、本から出掛けてみないかと誘われ、弥吉さんを誘つて三人で出掛ける。青葉の野山は格別の景色だ。①公園を見る、一年増しに立派になる。②困の山へ行く、人夫五名で植樹をしている。③支店の畑から営林区苗圃を見て、私の畑を回り七時過ぎ帰る。イワシ網外付属品、本日まで帳付け三、〇〇〇円、現金八〇〇円、合計三、八〇〇円出た。

▼六月三日

今日も朝から一天雲なき快晴、畑作は枯れるところも出た。イワシ薄漁で寂しい、熊さんは天野さんと農園行き、リンゴは花盛りも過ぎたが虫害は例年より少ない、手入れしているせいか葉よりも元気良い。また、リンゴの全盛時代が来るかも知れぬ。この暑さは暑中の如く日中は七〇度F(二二度C)を超える。父も元氣勝れぬと言いながらも、細々した仕事をしてい

る。

▼六月一四日

今日も天気快晴、二三日間も天気が続く。起床六時、イワシ薄漁、一段落で閑散だ。去る一日から七日くらいまでは目の回るような多忙、電話の忙しかつたこと、今までこんなこともない。今年は沖村方面のコナゴも大漁、沢江令、企も相当の漁があつたとのこと、何にしても漁があれば良い。企では昨日、フグ一万余りと、開き干しにしているとのこと。小樽久店員来てしばらく話す。四時頃久し振りに農園行き、熊さん、天野さんは中畑にコヤシをやっている。リングを見回る、上畑の旭、12号その他沢山なっている。この分だと米作以上だ。二〇日頃から忙しくなるだろう。サクランボもなっている。桐の芽をかき、帰つたのは七時。むし暑く雨にでもなりそう、今日の暑さは暑中の如し。子供らはシャツ一枚になつてゐる。

▼六月一五日

祝聖会例会日、四時十分前に起床、もはや明るくなっている。冬から見れば夜明けは早い。水で洗面しても冷たくなき気持ち

よい。四時十分出かける。ちょうど竹浪、西村君と会い同道する。朝早く新鮮な空気を吸うは気持ちよい。四時二十分から読経が始まり、一時間で終わる。後、例の通り和尚の部屋で話し、帰つたのは六時。二回ほど雷鳴がありにわか雨があつた。今日は青年団の運動会で、この分では天候如何と氣をмонदैいたがだんだんよくなり、七時頃、勇ましく花火が揚がった。八時頃に子供らが見物に行く。天気は曇りで雨は降らず、暑からず寒からずであつた。向きの天気だ。私は沢江へ行く、企、企では今日もフグ大漁、一、二万とれ、盛んに身おろして干している。二時頃運動会を見に行く、ずいぶん盛大だ。本陣の場所では田附さんがタラのそばろ製造をやっている。古平も加工製造をやるようになった。確かによいことだ。四時に帰つたが、五時頃になって雨が降り出した。よい雨だ。これまで二、三、四日間も雨がなかつたので、農家では大喜びだ。夜に入つて強く降る。

▼六月一六日

昨日来の雨は、実に農家にとつては甘露の雨で、畑作、水田などとも

大いに助かつた。今日も時々秋雨のような大雨が降る。これでどんな乾燥地もしみ込んだらう。イワシ漁も一段落したので、粕干しにも困らぬ、よい雨だった。熊さんは新地、浜中方面の集金に出かけた。本年はかなり成績がよい。沢江令、企では今日もフグが大漁、一万以上もとれたとのこと。浜にはフグこしらえに出面が二、三〇人も集まり賑やかだ。何の漁でもあつてくれれば町にとつてもよい。古平も鯿、鯿とばかりいわずに、何漁でも研究的にやれば、結構町も裕福になるのだ。

▼六月一七日

朝の内は曇り空で時々降雨がある。農園の仕事も出来ないで、熊さんは集金に出かける。田、芦谷主人、突然の病で昨夜亡くなられたとのこと。極く壮健な人であつたのに人間の寿命は分らないものだ。弔いに行く。イワシ漁なくさびしい。午後からは雨も全く止んで晴れ、風も吹いて道路も乾く。熊さんと妻は農園へ行き、キャベツや花苗などの植付けをやる、私も三時頃行く。リングもだんだん大きくなり、この分だと本年は五、六万は

袋掛けできるかも知れぬ。桐の脇芽を取つたり、松の下枝切りなどやる。昨秋本から貰つたトドマツ、トウヒなど勢いよく育っている。六時帰る。夜食はおいしい。

▼六月一八日

起床七時、雨の後は一天雲なき晴天だ。雨後、草が伸びたとて熊さんら五人で草取りだ。店はイワシ網が一段落したよう閑散だ。各森川の店員が来て昼食を出す。夕方浜へ出てみる、上ナギだ。子供達が泳いだあと焚き火をしている。この間まで寒い寒いと言つていたが早夏だ。夜、田主人の通夜に行く、丈夫な人であつたが分らぬものだ。

▼六月一九日

起床七時、一年で一番日の長い時だ。リングの花も咲き終わつたよう、この分だと月末からいよいよ袋掛けで忙しくなるだろう。田主人の葬式送りに行く。この朝、イワシ中漁とのこと、五、六玉とつたところがある。暑さが強まり単衣ものでよいようだ。午後、銀行へ行き、帰りヨに寄り話す。夕方浜へ出て見たが上ナギ、夕方の浜辺の景色はいつ見ても何とも言われぬ。イワシ船が出る、イカも少々とれたと

のこと、本年は大漁かも知れぬ。今日はこの頃では珍しい暑さで七三度F(約二三度C)

▼六月二〇日

今日は近頃では早起き、五時起床、洗面後、早々に浜へ出て見る。イワシ漁昨日から漁があり、二玉から多きは六玉ぐらい、この分だとまた漁があるかも知れぬ。片付けた網をまた出す者もある。五時半、学校から墓地の方まで散歩する。学校の庭はいつ見ても立派、建物といい位置といい実に申し分ない。梅野や田岸の畑を見て、帰ったのは七時、美国舎、かねて負債があるとのことであつたが、この度いよいよ整理すること、ずいぶん債権者もあるようだ。夜、支店の湯に入りに行く。節句が近づき鯉のぼり見る。

▼六月二一日

起床六時、今日は祝聖会一行が観音滝まで行く日だ。支度をして

⑦さんと共に八時半出かける。

快晴で無類の好天気、あちこち見ながら行く。桐の木はすいぶん沢山植えられている。泥の木に着いたのは九時半、大勢で忙しく田植えをやっている、古平もだんだん水田

が出来てきた。田植えなどは内地でなければ見られぬものと思つていたのに、今は古平でも内地同様に田植えが見られるようになった。

一〇時半、観音滝に着く。滝の水はドードーと流れ周囲の景色はよい。しばらく休み一一時に読経、一二時から昼食、ビール、酒に着もあり大いに楽しむ。全部で五、六〇人もいる。踊りや歌う人もいて賑やかだ。四時頃帰途につく。一日の行楽であつた。新聞では最近、天皇陛下のご容態がよろしからずとある。

▼六月二二日

起床六時、今日も天気快晴、暑さ厳しく七三度F(二二・八度C)まで上がる。単衣を着ている人が多い。ヨさん、札幌から帰ったというので自転車で行き、しばらく話しをする。イワシ漁、今日は二玉から五玉ぐらいとれた。吉井さんでは大サバ一〇〇尾余りとれたとのこと、これからだんだんとれるだろう。節句が近くなったので、あちこちで鯉のぼりを掲げている。

▼六月二三日

起床六時、今日も天気快晴、畑作物は天気続きで困る。しかし、

イワシ干しにはよい。この朝も二玉から多きは六玉ぐらいとれた、夏イカ漁二〇・三〇。七月に入れば大漁ならんと期待している。大阪のおじさん、困京ちゃん、田さよちゃんらが三時の船で来られるので妻が出迎えに行く。暑さきびしく夏衣装の人が多くなり、私もセルの単衣にした。

▼六月二四日

朝のうち曇り空であつたが、七時頃から雨が降り出す。大雨にはならず小降り程度だつた。農家としては今日一日ぐらいい大雨であつては良かった。家では節句の粉つきや掃除などやる、台所では節句のモチや団子作りで忙しい。明日から旧学校の空き地で大阪相撲があるとして、相撲取り連五、六〇人が町中をフラフラ歩いているので目立ち、町も賑やかだ。私は吉治と悦三を連れて支店の風呂に行く。今日は宵節句なので、シヨウブ、ヨモギなどを風呂に入れていい気分になった。

▼六月二五日

起床六時、今日は旧五月節句、大阪相撲も今日から始まる予定が、朝から曇り空で時々小雨が降るの

で延びた。節句といつても別に面白いこともないが、学校で松操会主催の敬老会がある。七五歳以上の高齢者が招かれ、老人七〇人余り、会員や来賓などで二五〇人ほどが集まった。私も出席したが、広い運動場もかなり埋まった。挨拶の後、余興などもあり、老人の歌や踊りもあつてなかなか賑やか。四時半に終る。雨は上がったが風が強い。

▼六月二六日

起床六時、天気快晴になったが、ダシ風が強く吹き暑さがきびしい。相撲初日で、見物人は一〇時からからボツボツ出かける。熊さんと妻は農園行き、草取りやアジウリの袋掛けなどやる。正午頃は寒暖計も八〇度F(二七度C)にまで上がる。余り暑いので浴衣がけの人が沢山いる。

(続く)



想い出の一夜

大澤 文子

「北見先生はねエ病床の中からひとこと『札幌には大澤がいるから大丈夫だよ』と言われたのよ……」

余市在住の歌びと中村千恵氏から告げられたのは、たしか平成二年のおそ秋の頃だったと思う。

それからの私は「海鳴主宰北見先生のご意志を継がなければ……」そしていち早く『海鳴さつぽろ短歌会』を結成しなければ……と思う気持ちは、脳裏から離れることはなかった。が私ごとにもつらい種々の事情があり、ご意志に沿い実現するまでには至らなかった。

暦はいつしか平成六年の春を迎えた。雪崩の崩るる如く諸々の事情にも日増しに落ち着きをとりのどしてゆく自分を感じた。ある日、札幌在住の『海鳴誌会員』の諸氏に相談してみた。ところが快く賛成の意をし

めされ、とんとん拍子にことを運ぶことが出来た。

先ず新会員募集の案内状を配布しなければ……。私は一晩考え会員募集の案内状を書いた。

印刷は長女迪子に依頼、四十部出来上がった。案内状を記してみよう。

「春日和のよい天気にくぐまれ、漸く北国にもおそ咲きの花便りがきこえて参りました。

さてこの度『海鳴誌北見恂吉先生』のご遺志を継ぎまして、短歌の勉強会を開催致します運びとなりました。

朝の散歩道に萌えはじめた雪割草、露のとう、蒲公英に目をむけられてはいかがでしょうか。はじめの方にも優しく教えて頂きますので、お気軽にお誘いあわせ是非ご参加下さいますよう。

平成六年五月

海鳴さつぽろ短歌会 Ⅱ

私はその案内状の何部かを持ち、道ゆく女性達にそつと声をかけすめてみた。今思うとなんて大胆な行動と冷や汗ものである。電車の中、バスの中でもそつと案内状を手渡し入会をすめてみたりした。

私の意を解されたのか、入会を希望された何人かの女性の方がわが家まで見えられた時はうれしかった。

古平町の方達も何人か入会を希望された方がありうれしかった。勿論、故長崎フユさんも早速電話で、

「私も仲間に入れてネ」と申し込まれた。

平成六年六月十二日午後一時、いよいよ『海鳴さつぽろ短歌会』は発足したのだった。会員は二十五名にふくらんだ。

会場は札幌市北一条のニユウ北海ホテルの一室と決定・初回の会場は花束に埋もれ、「故北見恂吉先生」への黙祷にはじまり、和氣藹々のうちにどうやら第一回目の歌会は終了。来月の歌会日を約し、三々五々帰りゆく会員を見送りホッと息づいたあの頃のわたしだった。

なお平成十三年四月二十日に

は合同歌集『リラの街』を出版するまでとなった。

今ここに『教え子』と題された、故「長崎フユさん」の短歌二十三首の中から何首か抜粋してこの稿にのせてみよう。

- ・ 教え子の送りくれたる宝石箱
- ・ 薬入れにして手元におかむ
- ・ 吾が病癒に非ずと医師言えしを餌与えつつ野良猫に告ぐ
- ・ 母の亡き教え子訓(さとし)の便り絶え今朝見る新聞に教頭とあり
- ・ クラス会の招待状の届きたり
- ・ 教え子は皆四十歳を過ぐ
- ・ 足なえのわがゆく足音覚えてか夜更け走り寄る野良猫のくろ

絵画を愛し、教え子を愛された故長崎フユさんのお歌は飾ることなく、淡々と日常をうたわれておいでなので、皆さんから好感をもたれているのだった。Ⅱどうして? わたしの歌を勝手にのせちゃってさア……」

あの世で長崎フユさんは笑っているかしら……それとも……

嵐も止み静かな真夜、ここより長崎フユさんのご冥福を祈りそつとペンを措いた。

古平と私

四・絵は見て感じるもの

葛 西 庸 三

年に何度が知人や友人から各種展覧会の案内状をいただく。

特別な事情のない限り、妻と連れ立って喜んで会場へ足を運ぶ。

平凡な鑑賞眼より持つてはいないのだが、作品を眺めているうちに、これはいいな、迫力がある、筆の運びに力がある、凄いなあ、と心の中で唸ったり、感動したりする。

また個展や公募展の中で、作家としての知人や友人がどのように変貌しているのか、を知ることにも興味が尽きない。

私がお世話になっている神田日勝美術館長の作家小松山博氏は、「小松山博が語る神田日勝展」という葉の中に、

「ぼくは芸術というものは、わかるものではなく感じるものではないかと考えている。」

小説は読んで感じるもの、音楽は聴いて感じるもの、絵は見て感じるものだろう。

一枚の絵には十万人が見れば十萬種類の見方と感じ方があり、また人は、生きてきた自分の「人生の殻から」はみ出した絵の見方をすることはできないのではないかと、という気がする――

と書かれていた。そうか、自分が見て、自分で感じたものがあればそれでいいのだな、と納得し安堵するのであった。

つい先日のこと。私達の『本を読む会』の通称「華さん」という仲間が、旦那さんと古平へ行ってきたという。

「新家寿司へ入ったら、真つ先に眼に飛び込んだのが穂井田日出磨さんの小さな「はずし娘」だったの。二

枚あったわ。凄くいい絵で感動したわ。また、店の中や階段の壁いっぱい絵があるのよね。ご主人に聞いたら先代が好きで集めたもの、と言っていたけど、寿司屋さんが小さな美術館になつてゐるとは驚きね。古平は粋な街。歴史と伝統があるのよ――

としきりに感嘆していた。華さんは書家で感性豊かな美女である。

古平を心の古里と自負している私は、華さんの言葉を聞いて自然に頬がほころびた。

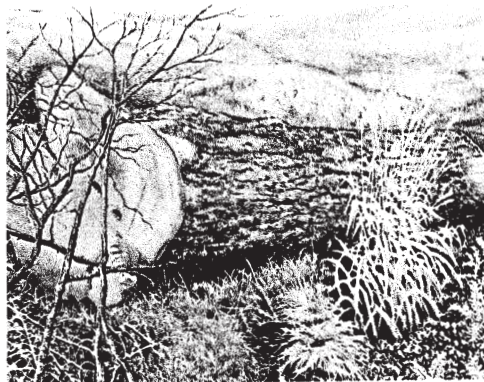
思い出すのは、古平美術協会が毎年開催していた『美術展』だ。

私が古平にお世話になつた昭和



→ 穂井田日出磨「はずし娘」

← 江利山義美「樹」



五十三年には第七回展で、以後十一回展まで開かれていた。今は何回目になつてゐるのだろうか。

昭和五十九年の『創立10周年記念・第15回古平町美術協会展』の時は島牧村にいたので展覧会は見ることができなかったが、穂井田日出磨会長から送っていただいた「記念誌」は今でも大切に保存している。

古平美術協会に所属して活動されていた何人かの方のお名前と作品は、今でも鮮明に思い出すことができる。

貯木場を描いた江利山義美さん。

呉服洋服生地 売り出し

明治二十四年 新地町で新規開店

残っている最も古い売り出し広告

明治の中頃から短い期間だったようですが、新地町で呉服や、当時

← 衣斐商店の売り出し広告

としては珍しい洋服生地類を販売していた、衣斐(いび)安吉商店の開店売り出し広告が見つかりました。これは衣斐さんの遠戚に当る小樽市の大橋一弘さん(小樽市議)から寄贈された、まだ整理が済んでいませんが二百点を超える資料の中にあつたもので、残っている広告としては最も古いものです。

開店廣告
一 吳服太物
一 洋反物類

外ニ仕立物數品
但レ現金正附一層モウケナレ



益御一同様御清福之段奉慶
貴候隨テ私儀今般御當地へ
參リ右物品聊取揃開店仕候尤モ物品
之義ハ鐵元へ逡迴之上染色幅尺等ハ精
々吟味致シ決シテ粗惡之品ハ差上不申
一際諸君ノ御目ニ立様大強勉致シ
格別廉價ニ賣捌キ來ル月々ハ日
御引立ヲ以テ多少不論賣出シ當日ヨリ
陸續御購求之程伏テ奉懇願候敬白

明治廿四年
七月

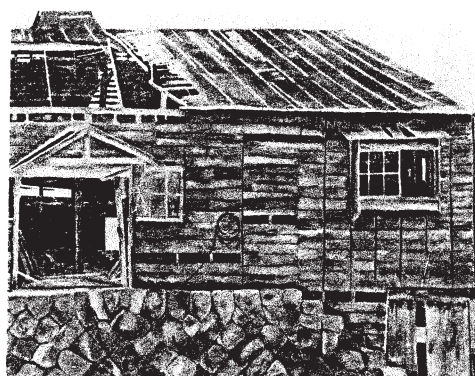


古平郡新地町
衣斐 安吉

當日三日間麗景呈上仕候

また、衣斐安吉さんについては全く資料が無く、戸籍も残っていません。質屋も営業していたのですが、その中にも名前が見当たりません。その店の後を④山口金治さんが引き継いだのではないかと、今その関係を調べてみたいと考えているところです。

→ 渡辺嘉之「番屋」



渡辺嘉之さんの朽ちた番屋などを描いた独特の色彩の作品群。緑川武志さんの「船」や「浜」。
西辻恵三さん、古屋五男さんの絵や、山谷重幸さんの金工作品などは毎年全道展や道展で見ている。
私の居間と書斎には、穂井田日出磨会長からいただいた「はずし娘」など三枚、そして玄関には私が余市を去る時に描いたくださった菅野昭三さんの「シリパ山」がある。
新聞に道展や全道展の入選者の

← 緑川 武「がん木のある浜」



発表される度に渡辺さんや緑川さん、江利山さんの名前を探る。会場にお三人の絵がないのが寂しい。
先日、穂井田会長にお電話をしたら、皆さんお元気ですよ、という言葉が返ってきて、ほっと胸をなでおろした。
そして、古平に住んでいた時、住宅を出て直ぐ左の狭い道を通る時、道路沿いの緑川さんの家の窓から映える船を描いた大きな絵を眺めながら歩いた光景を、とても懐かしく思い出したのである。絵を見る眼を開いてくれた古平美術協会の展覧会を、機会があれば是非見たいものだと思つた。

町内の学校探訪

沖尋常小学校

3

◇『御眞影奉置所』

「しんえいほうちしよ」、または奉安所などというのは、今では全く聞くこともない言葉だが、戦前の学校教育では何よりも大切にされたところであった。天皇・皇后両陛下のお写真と教育勅語を収蔵する小さな建物で、石やれんがなど耐火性の建材で造られ、それぞれの市町村の財力に依じて、荘厳で堅牢な建物であった。奉置所は校舎に附属して建てられ、児童・生徒は登、下校でその前を通る時は、脱帽し最敬礼をすることをしつけられていた。昭和二年、町と村内からの寄付や労力奉仕により、学校の南側に鉄筋コンクリート造りの御眞影奉置所を新築した。翌年には

沖村処女会がその前面に芝を植え、沖青勇団(青年団)は桜とイチヨウの植樹をした。

◇学級編制

昭和二年は在籍児童数が一一六名を数え最高となり、二学級編成であった。

学級 男 女 計(名)

第一学級

第二学年 一〇 二 一二

第三学年 一一 四 一五

第四学年 九 八 一七

第二学級

第一学年 一四 六 二〇

第五学年 六一 三 一九

第六学年 一二 二 一四

合 計 六二 五四 一一六

その後、漁業の衰退で校下の人口の減少にともなつて児童数も減少し、昭和三九年、古平小学

校に統合の時は五五名となつたが、現在は一(名)女子となつてしまつた。

◇校地の整備に植樹

明治四三年の校地整備から、昭和三四年の開校八〇周年記念まで、防風林をかねた風致林や記念植樹がしばしば行われた。

◇伝染病で臨時休校

当時の学校ではトラホーム(眼疾)に罹患している児童が多く、昭和五年、沖小学校でも検査の結果、約三五%の患者が見つかった。町内でも多くの患者がいたことから古平衛生組合では父母とも協議し、道庁からの派遣医を要請して、翌年

も治療に當つた結果大部分の児童が全治した。ところが昭和

六年十一月、町内でもひん発していたジフテリアに児童が感染したため、校舎を消毒し、全児童に予防注射を実施して一週間の休校とした。

この年、町内では二名のジフテリア患者が出て、うち二名が死亡している。

（続く）

桜桃	二〇本	明治四三年	沖村同志会
吉野桜	七本	大正一一年	須磨定吉
落葉松	一〇〇本	右 同	沖青年団
落葉松	三〇〇本	同一年	高野常吉
吉野桜	二〇本	同二年	沖青年団
落葉松	二〇〇本	同二年	高野常吉
独逸唐松	一〇本	右 同	高野常吉
公孫樹	三本	昭和三年	沖青勇団
もみじ	二本	昭和一〇年	田岸藤吉
オノコ	一本	右 同	田岸藤吉
えぞ松	一五本	同 三〇年	澤田徳太郎
杉	一五本	右 同	澤田徳太郎
桜	二本	昭和三年	八反田善助
桜	一〇本	同 三二年	睦婦人会
桜	一〇本	同 三三年	睦婦人会
桜	四本	同 三三年	沖青年会
松	二本	同 三三年	横野仁太郎
オノコ・五葉松	三本	同 三四年	坂下龍一

私のガーデニング

玉 谷 美 都 子

山に囲まれた通称・本陣の沢に住んでいる私の家のまわりでは、野鳥のさえずりを聞いて目覚め、一日が始まります。

耳をすますと時折聞こえてくるウグイスのさえずり、

「ボーホケキヨ、ケキヨ、ケキヨ、ケキヨ……」

「いい鳴き声、昔と少しも変わらないアー」

と、うつとりと聞きほれます。そのほかにも数種類の野鳥がいて、その鳴き声に耳をかたむけています。

でも、昔と変わったと思うことはお花です。私は七年前から横文字のガーデニングを始めています。毎年のように新種が回り、花好きな私にとっては何よりの楽しみのひとつです。

我が家の『お花の庭』を、ベランダから眺めるのが今では日課と

なり、豊かな気持ちにさせてくれるひとときは、また格別なものがあります。

庭に出てひと回りし、

「おはよう！ 今日元気ですかア……」

と、お花たちに声をかけます。

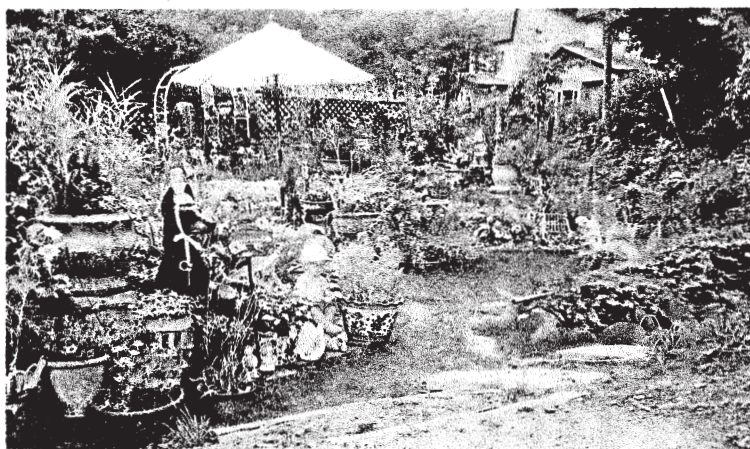
その中には野の花もあり、可憐な姿を見せてくれます。

先日のことです。『野の花』のことがテレビで放映され、私は食い入るようにそれを見ていました。野の花は根強いもので、可愛がるとよく育つことを知りました。

私は花の新種を追いかけているうちに、四季折々に、可憐な花を咲かせてくれていた野の花のことを忘れがちだったのです。昔からある月見草・昼顔・ドクダミ・忘れな草・親子草などなど、数え切れないほどあり、今でも力強く生き続けています。

「そう言えば幼少の頃、三つ葉のクローバーの花を摘み、それを編んで首飾りや冠を作つてよく遊んだっけ……」

あの頃の懐かしさがよみがえりました。これからは野の花への思いやりも忘れずに、私のガーデニ



→ 玉谷さん宅の丹精こめたガーデニング。カラー写真でご覧いただけないのが残念です。

ングを楽しみたいと思います。環境汚染のことが問題になって現在、野の花も野鳥も負けずに生き抜いてほしいと願っています。

ふるさとのアルバム

— 第9集 —



ニ〇ページのアルバムを作り、敬老会の参加者に配布しました。その後、ご希望される方がおられますが残部はありません。

増刷しました「ニシン漁」第1・2集はありますので、ご希望の方はご連絡ください。お届けします。

八月十八日 [晴]

わが軍は、連隊長から積極的な戦闘は避けて専守防衛せよ、

老兵の綴り方

あ、樺太国境守備隊

橋 義 春 [遺稿]

との命令は出ていたが、しかしそれとは全く逆に、ソ連軍の攻撃はますます激しくなるばかりであった。

師走を占領した敵軍はそこに火砲を据え、その砲撃は熾烈を極め、それに加え戦車を先頭に、歩兵の大部隊が一挙に攻め寄せて来た。その進撃を阻止するために本格的な攻防戦となり、彼我入り乱れての激戦が展開された。わが軍の連隊砲も敵の戦車を撃破するなど大活躍をし、ソ連軍の歩兵部隊にも多大の出血を与えた。

連隊本部では、ソ連軍の攻撃が本格的になりつつあることを察知し、停戦交渉の速やかな実現を考慮しながらも、午後三時半頃、連隊命令が八方山陣地の全軍に出された。

「明十九日、ソ連軍は八方山陣地を猛攻撃するものと判断される。機先を制すると共に包囲している敵を撃破して、南進を阻止するために、明朝黎明を期して連隊は一斉突撃を敢行する。今後の戦闘継続のために、各陣地は補修強化に努め、次の命令を待つべし」

いよいよ来るものが来た。古屯の円形陣地の激戦で、死を覚悟して奇跡的に助かった命だ。

明日の夜明けと共に敵陣に突入し、思いっきり大暴れして、戦死した大隊長や戦友の仇を討つて八方山の華と散るか。それによし、どうせ助からない命だ。もう何も恐いものはない。ただ一つ心残りは、ラッパ手として突撃ラッパを力いっぱい吹き、全軍の士気を鼓舞し、日本兵のラッパ手ここにありと、敵の心胆を寒からしめてから死にたかったが、無念の一語に尽きる。

午後二時頃、小笠原少佐が長となり、連隊副官油谷大尉、向地視察隊大越大尉ほか兵隊が二十名くらい、軍使として白旗を掲げ、ラッパ手がラッパを吹きながら敵の陣地へ停戦交渉に向かった。

相手はソ連だ、大丈夫かな。もしも発砲でもされたらたちまち全滅だ。それに、こんな時にラッパ手が行進ラッパを吹きながら向かったら、一斉射撃を浴びるのではなからうか。もしも私がラッパを持っていれば、当然、私は連隊本部の一員なので、軍使の随員として停戦交渉

に行つたであらう。恐らく皆決死の覚悟でソ連軍陣地に向かったのではなからうか。

夕方、小笠原少佐一行の停戦交渉が成立し、無事で戻つて来た。得体の知れない相手との交渉なので、ご苦労の多かったことと推察される。停戦協定の内容は、十九日午前零時戦闘中止・武装解除・兵器集積ということであった。

停戦交渉はまとまったが、ソ連軍は攻撃の手をゆるめず、わが軍もそれを阻止するために反撃を繰り返した。たそがれ近い八方山の稜線に敵の戦車が現れたが、友軍の連隊砲の迎撃に慌てふためき遁走していった。

連隊本部では山上に白旗を掲げ、両軍の戦闘中止を呼びかけたがソ連軍の攻撃はいぜんとして止まず、わが軍も反撃の猛射を繰り返した。暗くなりかけた頃、休戦ラッパが鳴り響き、山上の白旗が再三振られて双方の射撃が小止みになったが、完全に銃声が聞こえなくなつたのは夜中の十二時過ぎだったと記憶している。

― 続く ―

古平の思い出

楠 美 一 路
(楠 木 吉 藏)

私は大正一四年、函館市に生まれましたが、古平に行くまで転校、転校で九校目でした。昭和一四年から一五年まで浜町の池田家に下宿し、お世話になりました。そして昭和一六年、古平尋常高等小学校高等科第二学年を卒業した者です。

この度、池田テルさんより『せたかむい』のことを聞いて投稿しました。高等科のとき泥の木に同級生がいて、

◇

◇

◇

貧しくて売らねばならぬこの仔馬うなだれながら曳かれ去り行くうなだるゝ仔馬にしみじみ訊聞かす売らねばならぬ訊聞かす明日売らる仔馬の世話するこの吾子に母さんお前話してくれ婆ちゃんの手術に銭いる訳話す妻を背にしてキセルの首締む暗がりの馬小屋の隅の静けさに吾子の嗚咽が胸にひびつく仔馬売る話進めば尚下がるうなだるばかりの首を撫でやる売られゆく仔馬を見ると素足の子カバンつかんできおい飛び出すあの仔馬売るゝ夜を語らいつ吾子と夜明けの星を見し日をうなだるゝ仔馬を撫でて売り渡す夜露しつとり掌に沁み残る売渡し納屋へ戻れば足跡よ仔馬の去りしまゝに消えゆく

小馬がいるとき一緒に行ったことがあります。馬小屋に行ったら仔馬だけ一頭いました。まぐさ桶を見た友達は、家へカバンを置いて来るなり飼い葉を切り出しました。そのしぐさ、手さばきのよさに見とれていたことが八〇歳の今も忘れません。哀しい仔馬はもちろん創作ですが、同級生だった友達の仔馬のことが胸に残っていたから出来たものです。

クマに注意



昔は「北海道から来た」と言えば、「北海道は家の庭までクマが来るんですってネー」などと言われたものだが、今は本州でもクマが人家の側に現れる時代になった。もうクマは北海道の専売特許ではなくなったようだ。確かに明治の開拓時代はクマは猛獣として脅威であり、クマの悲劇は各地にあった。泥の木の熊野神社も、元は「クマの神社」であった。

明治九年最も古いものと思われるが、熊・狼は耕地や牛馬への被害が大きいため、捕獲した時は熊・狼共に一頭につき二円を給する。但し両耳を持参すること。

明治一一年には熊一頭五円となり、皮や肉は捕獲者の自由となった。また「アマツボ」(不明)を使って獣を捕獲するのは危険なので、みだりに設置することを禁じる。但し、猛獣の被害のあるところでは、その場に目印や縄を張ること。

熊の皮の価格は、大九〇一〇円、中七七八円、小三三五円、また、従来の価格として熊の皮極上品は米一斗一五kg、熊の腹い極上品は米三斗五升(五二・五kg)とある。

短歌

吉平町岬短歌会

わが町より仰ぐに遠き積丹岳の残雪今し夕日に映える

池田 テル

懐かしき友がしょつこり訪ねきぬ過ぎたる時の早さにたじろぐ

金子 寿子

吹奏楽のトランペットを吹く孫は拍手に笑ふ浴衣コンサート

坂本 信子

いつ来ても飽かずに仰ぐ羊蹄山今日はいくすじ残雪光る

鈴木 時子

朝露に幾何学模様の蜘蛛の糸プリズムの如光り輝く

田中 香苗

夏近く交通安全の辻地藏真紅の頭巾に衣替へしたまふ

丹後 初江

牧草はロールとなりてころがれり我が家吹きゆく干草の風

東 美知

潮ひきし前浜の磯に這ひいでし蟹は石上に泡吹きてをり

堀 典子

☆

《遣 詠》

寺田 清治

貰ひたる活きよきヒラメは俎にあばれて我にトゲをさしたり



十月号

吉平俳句会

涼しさやここ積丹の神威岬 斉藤波留

白木槿ギタギタ落ちて闇白し 山口悦子

風鈴や潮音頭のしらべかな 越野敏雄

夏海ややこの大海の油風 大和田絵伊

一ト日ごと閑なくなぐらし今朝の秋 高橋重子

短パンの娘等連れ立つてキャンプ張る 仲谷比呂古

潮騒を遠く聞きゐて月今宵 室谷弘子

暖房をまた入れさせる北の夏 外山俊久

幾山河越えて浜辺に盆の月 渡辺嘉之

秋の海潮の流れの迅さかな 堀 典子

海の蒼空の青さや秋の風 本間寿昭

海風ぐや夕影の彩見て涼し 越野清治

古 平 俳 句 会



〔二五〕

— 一〇月号 —

海風ぐや晩夏の照りを撥ね返す 越野清治

岬打つ波の力に秋立ちぬ

知床のつづく断崖夫婦岩 斉藤波留

大夕焼け湿原の空染め上げし

見る阿呆踊れ踊れと袖引かれ 山口悦子

収穫祭南瓜の山に人の列

ペランダの親娘に映ゆる揚花火 越野敏雄

ガラス製風鈴の音に癒されし

潮の香と夏霧に明け港町 大和田絵伊

鉢植に実梅しつかり育ちをり

流れ星校庭の木に止まるや 高橋重子

菅笠の踊太鼓に僧もゐて

霧にふと草木匂ふ岐れ道 本間寿昭

爽やかにたらつり節の声微か

名月の潮の昂ぶり見てをりぬ 室谷弘子

船頭の小節きかせて音頭取

亡き友と酒飲み交はす明易し 外山俊久

木洩れ日に老鶯郭公二重奏

風耐へて耐へぬ残暑のありにけり 渡辺嘉之

唄継がれ踊継がれて盆踊

秋空や峰に白雲せめぎ合ふ 堀 典子

海面打つ石切り三たび跳ねて秋

踊の輪入る好機を見失ふ 仲谷比呂古

古書好きの子に満天の月明り



古平を訪れた 著名な俳人

高野素十 昭和27年8月、吟行の途次古平を訪れ、旧歌棄トンネル前で
古平ホトトギス会員と記念撮影（前列向かって左から4人目）



高浜年7尾 昭和43年7月、
古平町で行われた全道ホト
トギス俳句大会に出席、



石田雨圃子 古平を3度訪れ古平ホトトギス会員に句作
を指導、昭和30年、波止場にて（向かって左から3人目）



野村泊月 昭和5年6月、古平町吉井旅館中庭にて
（前列向かって左から2人目）

悠

雜詠「十月号」

主宰 水見 壽男

夏帽子父特注のパナマかな 山口悦子

夏帽子少し斜めが似合ひけり
静寂を破りたる蟬時雨かな

海霧深しエンジンの音船の影

連峰や青葉が包む運河街 越野敏雄

親馬の乳をまさぐり蠅を追ふ

岩燕飛び交ふ沖の巨船かな
万緑の羊蹄山を雲掠め行く

羊蹄山の鼓動聞こえし青嵐 高橋重子

故郷や心にしみる河鹿笛

植ゑかへの苗にやさしく風薫る

夏の日差しに溶けし波の音

漁師らの潮にまみれし夏帽子 室谷弘子

百選の渚を覗く夏帽子

潮の目をたぐり寄せたる夏の漁

潮むすぶ岬みさきの茂かな

草芽生ふ部落総出の牧開 外山俊久

風軽く香りほのかに夏初め

初郭公緑萌え立つ林より

青嵐波のかたちを崩しゆく 渡辺嘉之

夏草や海鳴り遠き潮曇

夏草の匂ひに満ちし風来る

万緑の森に原始の風遺る

月影の赤くたゆたふ夏の海 堀典子

海霧迫り荒き粒子に海閉ざす

薫風や草を食む馬駆ける馬

雨あとの色極まりし青葉かな

漁船を待つ間の日差し麦の秋

南風や波は礁につまづきぬ 本間寿昭

サハリンの島影望み昆布採る

女子衆一番刈の昆布干す 【句評】

海鳴りて潮鳴りて海霧襖なす 越野清治

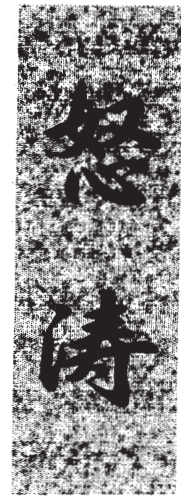
轟音の迫り岬を塞ぐ海霧

草原と港をつなぐ青嵐

南風の潮鳴り沖に漁れる

豊漁を告げる鳥賊火の真一文字

古 平 俳 句 会



〔一四〕
— 九月号 —

滝音の響くばかりや海は風ぐ 越野清治

句碑凜とあり石狩の初夏の風

夏潮を見下し山の露天温泉に 斉藤波留

さくらんぼ口に飽きても目にあかず

憂きこともしばし忘れて蟬時雨 山口悦子

散歩道蟬の時雨を浴びにけり

蛙鳴くのどのふくらみ永久のもの 越野敏雄

日除けとて葉裏で凌ぐ蝸牛

夏潮の香りさいぎる岬の湯 大和田絵伊

音のして木の雨とはありがたし

水の香の漂ふ木道花菖蒲 高橋重子

海のあるこの町が好き蔓手毬

昆布の島合図の旗に浜騒ぐ 本間寿昭

神威岬風の行く先夏野原

一陣の風に遊びて夏の蝶 室谷弘子

余りある風をまとひて花菖蒲

森林に若葉の芽吹く日和かな 外山俊久

まず一服香り楽しむ新茶かな

夏野原風の色にも切れ目なく 渡辺嘉之

夏草の匂ふ牧場の海見へて

かがやきが輝きを吸ふ夏海面 堀 典子

紫陽花や雨ごと藍の球を噴く

囀の声に目ざめし磯の宿 仲谷比呂古

満開のつつじの庭の明るさよ

前庭の鴉の数のやや増えて縄張り範囲にあるらしわが庭あかときに峽の鴉の声せはし今日塵芥の収集日にて束ねなす鴉にあらむその声に飛び立つ仲間一斉にして如何なる幸不幸待ちあむ明けくれの空を領して鴉鳴き交す不吉なる鳥と言はるる鴉にあれど庭に常づね憩ひて親

前山の鴉

瀧 内 優 子

鴉道あるやも知らず日日庭に飛び来る方位飛び去る方位踊るがにリズムをとりて庭池に鴉一羽水のみに来る庭池に水飲むと寄る子鴉が足ふみはづし己れ慌てる春泥に散りばふ足の跡のごと鴉か一群いま空にある群なして帰りし鴉眠りあむ頂の樹のシルエットやさし

編集雑誌記

▽今月は先ずはお詫びから——
朗読のボランティアをされている宮森依子さんから「？」と直ぐ電話があり、大ミスに気づいて恐縮しています。『年表で読む古平の歴史』と『あゝ樺太国境守備隊』ですが、八月号と同じものを九月号に掲載してしまいました。これで終りかと思っていましたら、越野会長さんから「俳句の『怒濤』が八月のが載っていた」というのです。何となくせわしいことも重なってどこかヌケていたようで、大いに反省することしきりです。

原版は予備と二部作成していて、今月・来月号と分けて引き出しに入れておくのですが、そこで取り違えたようで、全く何の疑念も無く印刷してしまいました。

今月号は「古平町弘報第一号」を付録にする計画がありましたので、俳句の追加訂正と合わせてB4二枚(八ページ)枚数が増えてしまいました。が、気を入れて、万全でいきたいものと思っております。

▽この頃はネコの目のように目まぐるしく変わる天気ですが、少し寒さを感じると「冬間近か……」と、

秋と冬の入り混じったのが今の季節のようです。九月以来、しきりに台風が日本本土にも上陸しています。が、幸い北海道の日本海側では、今のところ今年は穏やかに過ぎていきます。刻々と伝えられる台風のニュースはドキドキさせられますが、昭和初期の新聞の天気予報は、後志・石狩地方などはまとめて「北東の風、曇りのち晴れ」程度の二行ぐらいで終ります。

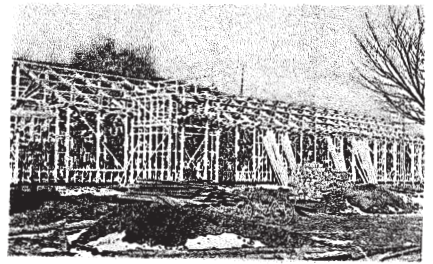
これが戦時中になると、日本上空の天気情報を敵に知られると空襲を受ける、ということ、曇り・晴れなどはもちろん、風向き・風の強さ・潮の満ち引き・雲の形もだめで、せいぜい「暑さ、寒さ」くらいだけが自由に書けたそうです。

▽古平でも秋サケが話題にのぼるようになります。釣りさおも浜に立ちんでいます。今年のサケ漁はどうなんでしょう。秋の味覚でもあり、大漁を期待したいものです。古平川の堤防はトリムクラブのコースにもなっていますが、先日新聞によると、「サケの密漁で逮捕」などと出ていました。明治時代、サケは古平川河口や沿岸近くでは建網が設置され、鯀漁と並ぶ重要な産物として盛んでした。

古平町史年表

昭和26年(1951)

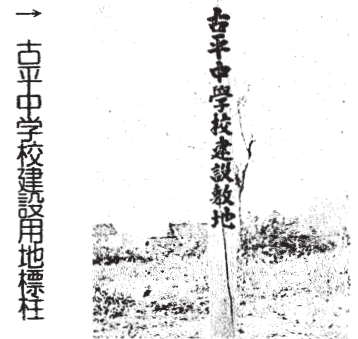
- ▲ホトトギス同人高浜年尾が「古平盆踊り」の一文を雑誌「ホトトギス」1月号に発表する
- ▲町内の主食購入登録店が決められる(米など配給制)
- ★明和小学校新築落成式並びに創立40周年記念式が行われる
- ▲青年団体連絡協議会が「町議選立候補者の抱負を聞く会」を古平劇場で開く
- ▲新生婦人会が結成され、会長に平田リキが選出される
- ▲北海道配電株が北海道電力株と改称する(古平変電所)
- ▲古平町弘報発行条例が制定される
- ▲古平中学校建設敷地の整地を勤労奉仕により始める
- ▲古平中学校建設特別委員が選任される
- ▲古平港が第三種漁港に指定される
- ▲古平町弘報第1号が発行される(7/1) <付録>
- ▲小樽開発建設部が設置され、古平町がその管轄下となる
- ▲小樽・塩谷・余市・大江・赤井川・美国・古平各市町村間の消防相互応援協定ができる
- ★NHK素人演芸のど自慢コンクール大会が古平小学校を会場に開かれる
- ★古平中学校地鎮祭並びに起工式が行われる
- ▲正隆寺が石倉を残して全焼する。出火原因は不明である
- ▲稲倉石鉱山に最新式の重液選鉱設備が完成する
- ▲稲倉石小・中学校が校歌を制定する
- ▲漁業制度対策として新旧漁業権の切り替えが行われる
- ▲古平～湯内間隧道の貫通式が中村隧道口で行われる
- ★オリオン座が新築落成し、開館披露が行われる
- ▲日米講和条約締結を記念して、町が町有地に植樹をする
- ▲すけそう漁について業者間の賃金協定が行われる
- ▲都市計画道路区域内の建造物の撤去作業が始まる
- ▲古平町史編さん委員会条例が制定される
- ▲古平信用協同組合が古平信用組合と改称する
- ▲住宅金融公庫融資による住宅第1号が完成する
- ★本間酒店(繚欄)と余市酒店株が合併する



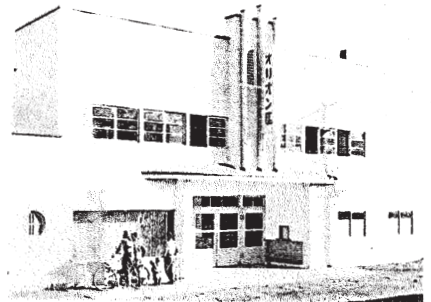
↑ 明和小学校の上棟式



↑ のど自慢の練習風景



→ 古平中学校建設用地標柱



↑ オリオン座落成



→ 本間酒店(株)の銘柄
[繚欄]

発行所
古平町役場
〒42、126、159
編集発行人 成瀬善之助
印刷所 北海道文化通信社印刷局
小樽市鶴巻町東六丁目十六番地
〒5181番

古平町弘報

毎月月末発行

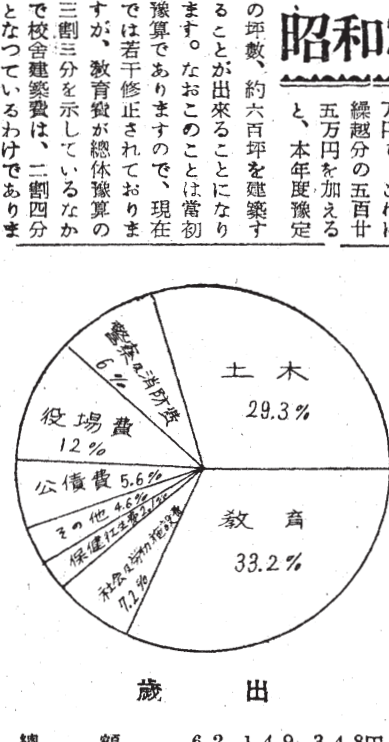
(第1号)

行事予定
七月四日 農業委員選挙
プロック会議
七月九日 琴平神社祭典
七月十日 NHKのど自
慢大会
七月二十日 農業委員選
挙日
七月下旬 中学校建築特
別委員会、及協力委
員会
同

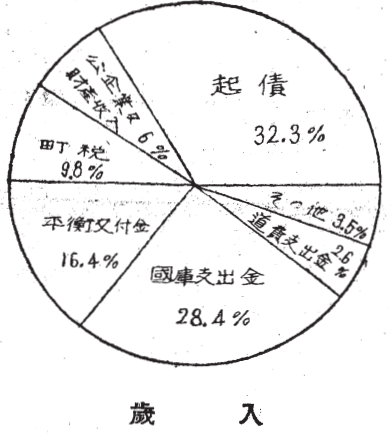
昭和26年度予算のあらまし

重点は中学校、船入潤 施策の鍵は財政面の強化

今年度の予算は、1、中学校の建築、2、船入潤の整備、3、都市計画事業の三つが重点である。財政的な基礎を固め、将来にわたる施策の鍵は財政面の強化にある。財政的な基礎を固め、将来にわたる施策の鍵は財政面の強化にある。財政的な基礎を固め、将来にわたる施策の鍵は財政面の強化にある。



総額	62,149,348円
役場費	7,500,579
警察及消防費	3,651,614
土木費	18,247,380
教育費	20,690,320
（内高校建設費）	18,500,000
社会及労働施設費	4,471,864
保健衛生費	1,311,140
公債費	3,317,252
その他	2,958,193



総額	62,149,348円
町税	6,129,450
公企業及財産収入	3,714,134
起債	20,125,000
道費支出金	1,617,021
国庫支出金	17,703,429
平衡交付金	10,203,530
その他	2,656,784

漁船登録の検認

19日—24日まで施行します

漁船の検認は、漁船の安全と漁業の発展のために必要です。検認の期間は19日から24日までです。検認の結果、登録が認められれば、漁業活動が正常に行われます。

古平町議会だより

常任委員選任さる
古平町議会第二回定例会において、常任委員の選任が行われました。選任された委員は、町民の利益を代表し、議会の機能を果たすものと期待されています。

中小企業等協同 組合設立手続

一、組合設立の主要条件
1. 組合員は、法律上の法人であること。
2. 組合員は、法律上の法人であること。
3. 組合員は、法律上の法人であること。
4. 組合員は、法律上の法人であること。

創刊にあたり

古平町長 伊藤 由松

政治の自由性とか、自主性というものは民主政治の生命であり、民主政治の生命である。民主政治の生命である。民主政治の生命である。民主政治の生命である。

古平町長 伊藤 由松
政治の自由性とか、自主性というものは民主政治の生命であり、民主政治の生命である。民主政治の生命である。民主政治の生命である。民主政治の生命である。

古平町長 伊藤 由松
政治の自由性とか、自主性というものは民主政治の生命であり、民主政治の生命である。民主政治の生命である。民主政治の生命である。民主政治の生命である。

劃企的農業委員會發足

これが完成に懸命の努力をつくしているが、出来ればこの地方に誇る教育の殿堂になるであらう。待てるや切なるものがある。

一齊取締期間です。から野
大脈を發見の方は衛生保
連絡して下さい。

民各位の絶へない叱正
べん體による外がない。
逃げ道をつくるわけでは
ないが、本紙がその使命を
達成しうるのも、唯單なる
機械的な行政の輔導紙に
ちて終ふのも町民各位の
紙に對する熱意如何で、

「ふるびら」のために、
民各位の努力と誠意を待た

年 の 人

ればこの地方に誇る教育
殿堂になるであらう。待
れるや切なるものがある。

からめ

大麻(あさ)の一
齊取締について
既に皆様御承知の通り大
(あさ)の栽培は堅く禁
れて可うでしよう。

1

ものこと

子

でもその使命のために邁進して行きたい、それには、民各位の絶へない叱正・けん導による外がない。

☆☆☆☆☆

のそんでやまない。
中学校は今全町民擧げて、
これが完成に懸命の努力を

のそ中率

これが完成に懸命の努力
つくりしているが、出来あ
ればこの地方に誇る教育
殿堂になるであろう。待
れるや切なるものがある